

Title	パンチェンラマと乾隆帝の会見の背景にある仏教思想について
Author(s)	石濱, 由美子
Citation	内陸アジア言語の研究. 9 p.27-p.62
Issue Date	1994-06
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20663
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

パンチェンラマと乾隆帝の会見の背景にある 仏教思想について

石濱 裕美子

目 次

1. はじめに
 2. パンチェン四世訪清関連史料
 3. チベット文と満漢史料の比較対照から見たパンチェンの訪清日程
 - 3.1. 『起居注』『実録』から見たパンチェンの訪清
 - 3.2. チベット史料から見たパンチェンの訪清
 4. パンチェンの訪清間の活動、並びに、乾隆帝の対応
 - 4.1. パンチェンの訪清間の活動
 - 4.2. 乾隆帝の対応
 - 4.3. 人々の反応
 5. 会見の背景にある仏教思想
 - 5.1. 八月七日の仏教儀礼訳注
 - 5.2. パンチェンと乾隆帝の神学的位相
 - 5.3. 乾隆帝とパンチェンの前世における会見について
 6. まとめ
- 引用文献

1. はじめに

乾隆四十五年（一七八〇）八月十三日は乾隆帝七十才の誕生日（万寿節）であつた。パンチェンラマ四世、⁽¹⁾ペルテンイエーシェー（blo bzang dpal ldan ye

(1) 本文中の日付は全て陰暦かチベット暦に基づく。特に記載のない場合は陰暦である。

(2) 歴史的にパンチェンラマの世系が認識され始めたのはダライラマ五世の師、パンチェン・ロサン・キューキ・ゲルツェン（blo bzang chos kyi rgyal mtshan）からである。この人物を一世とすると本論稿で扱うペルテン・イエーシェーはパンチェンラマ四世となる。しかしパンチェンの世系をツォンカパの弟子、ケドゥブジェーにまで遡及する信仰もあり、これに基づくペルテン・イエーシェーは六世パンチェンラマとなる。現在中国の学者は後者の代数を採用しており、一方、我が国の研究者は前者の代数で言及するものが多い。本項では前者の代数を採用した。

shes sgron me, 1738-1780) はこの日を祝うために遙かチベットの地から中国に来錫した。パンチェンは当時皇帝の駐留していた熱河の避暑宮において皇帝の長寿を祈願する長寿儀軌 (Tib. brtan bzhugs, Man. tangshug) を修し、同年、十月末に突如発病、十一月一日到北京の西黄寺において不帰の人となった。七月二十一日に熱河に到着してから遷化に至るまで、パンチェンが皇帝とともにあった期間は三ヶ月あまりであった。

このパンチェンの訪清は、チベットの大ラマの訪清としては清朝鼎立時のダライラマ五世の招請以来実に百数十年ぶりのことであった。この一事だけをとても二人の会合は中国・チベット関係史上における一大事件であったことが解る。

当時の清朝はダライラマ五世の招請時とは異なり、その軍事力の及ぶ版図は最大域に達していた。そしてその影響下にあるモンゴル、チベット、青海の民族間ではチベット仏教は多大な尊崇を集めていた。さらに、乾隆帝がチベット仏教寺院に建立していた御製の碑文を年毎に検討していくと、乾隆帝のチベット仏教に対する崇拝・供養はこの時期最高潮に達していたことが解る。⁽³⁾ このような背景のもとで行なわれたパンチェンとの会見が一大ページェントになったであろうことは想像に難くない。

チベットと清朝の外交の性質については現在のチベット問題とも絡んで様々な見解が交錯している。その一連の主張の中でパンチェンと乾隆帝の会見も多くの研究者によって言及されてきた。しかしそのほとんどは現代のチベット問題と絡めた意図的かつ一面的な評価であるように思われる。例えば、パンチェンの中国に到るまでの道中を『パンチェンラマ四世伝』より明かにした多傑氏は、パンチェンの入覲は各民族間の関係を融合し祖国 (=中国) の統一に広く深い影響を与えたのは必定、と述べ (多傑 1990, p. 12)、張羽新氏はパンチェンの

(3) この後数年にしておきたゲルカ戦争に辛酸をなめた乾隆帝はチベット仏教に対する信仰を雍和宮碑文「喇嘛説」に代表されるごとくかなり功利的かつ現実的なものに変化させた (張羽新 1988, pp. 339-343)。

入覲の政治的原因に、当時パンチェンがイギリスから通商条約の調印を迫られていた事情を挙げている。それに反対するパンチェンと乾隆帝は「祖国の統一を堅持するという」姿勢が一致したため会見に及んだという（張羽新 1989, pp. 70-71）。また、郭美蘭氏は熱河におけるパンチェンの活動を宮中に残されていた満州文献から復元し、結論部分において清政府はパンチェンの影響を「利用」して、各少数民族上層人物との関係を密接にし、チベット、モンゴル地区の統治を強化したと述べている（郭美蘭 1992, p. 155）。これらの諸氏の評価には、現代中国における漢族中心の政治理念（反帝国主義・祖国統一）をもって、当時の事件を裁断するという共通の性格が見受けられ、言うまでもなく一面的な見方である。

一方この会見を当時の思想の文脈の中に位置付けて理解しようという試みは未だなされていない。この会見が歴史にどのように作用したかということを述べるには、まず当時の人々の視点にたつてその意味を正確に理解することが前提であろう。歴史的作用を産み出す母胎はまさにその会見に居合わせた人々であるからである。

本稿ではパンチェンと乾隆帝の行動から、会見自体がどのような性質のものであったのかという点をまず明らかにし、さらにその乾隆帝の行動を目の当たりにしていた人々がどのような認識を有していたのかという点にも目配りしつつ、乾隆帝とパンチェンの行動の背景に存在した全く非中国的な思想について明らかにしていくものである。

2. パンチェン四世訪清関連史料

パンチェンの入覲に関しては、チベット・モンゴル・満州・漢文等で書かれた多くの同時代史料に加えて、建築物・絵画等の非文字史料も存在する。まず、筆頭に挙げなければならないのは青海の大ラマ、ジャムヤンシェーパ二世によって一七八五年前後に記されたパンチェン四世の外伝（P4N）である。訪清の三ヶ月間は特に記載が詳しく、一日ごとに赴いた場所、届いた書簡、会合し

た人々、布施その他の詳しい記録が残されている。

また、同じく日記調の史料として乾隆帝七十の賀に同席した朝鮮使節一行中の一人、朴趾源⁽⁴⁾の日記『熱河日記』が挙げられる。儒教文化圏に属する著者は乾隆帝によるパンチェンの盛大なもてなしを冷徹かつ皮肉な眼差しによって観察しており、チベット仏教をめぐる清廷の一連の対応が伝統的な中華帝国観からいかに逸脱していたかを示してくれる。一方、パンチェンをもてなす側の乾隆帝の行動の記録としては乾隆帝の『起居注』が挙げられる。

パンチェンの訪問は中国にとってはグライラマの訪清以来百年ぶりの国家的事業であったために官僚組織の多くの部署が動き、その結果多くの文書が残された。パンチェンが入観して以後の史料は、皇帝の側近にあって宮中の雑事をとりしきる内務府の檔案『内務府奏銷』に特に多くが残されている。皇帝の上諭を集めた『滿文上諭檔』における皇帝の公式の発言も重要な史料の一つである。また、理藩院文書にはパンチェン関連史料が多数含まれていたと思われるが、周知のごとく現存していない。以上の文献のほとんどは満州文か漢文で記されている。ただし、これらの公文書は事務文書であるため、迎接の準備、宴席の準備、宮中の蔵から賞賜した物品のリスト、官員の賞罰、さらにはパンチェンの聖安を問う使者の報告等、瑣末なものが多く、滞在の全体像を知るためにはやはり前述の日記文献の方が望ましい。

また、乾隆帝はパンチェンをもてなすために熱河と北京にいくつかのチベット仏教の廟を建立した。建立に際して刻まれた御製の碑文は、皇帝の公式の肉声⁽⁵⁾を我々に伝えてくれる。両者の私的な肉声を伝える史料としては書簡類があ

-
- (4) 朴趾源は朝鮮使節の正式な随行員ではないために、『実録』等には名前を見ることはできない。
- (5) 「須彌福壽廟碑文」乾隆四十五年六月（熱河，蔵・漢・満・蒙；KBY, pp. 458-462；張羽新 1988, pp. 462-464），「昭廟六韻詩碑」乾隆四十五年（香山，蔵・漢・満・蒙；KBY, pp. 463-465；張羽新 1988, pp. 468-469），「寫壽班禪聖僧讚碑」乾隆四十五年（西黃寺，漢・満；張羽新 1988, pp. 469-470），「清淨化城塔記」乾隆四十七年（西黃寺，蔵・漢・満・蒙；KBY, pp. 466-470；張羽新 1988, pp. 470-473）等の碑文が存在する。これらの碑文の文面は、漢文が張羽新（1988）に採録されており、蔵文がKBYに収録されている。

る。『パンチェン四世伝』(P4N)には相互の間で交換された書簡がいくつか引用されている。一方、公式の書簡としてはパンチェンから乾隆帝に出したチベット・満・漢三体の上疏文が現存している(王家鵬 1988)。

文献史料以外の史料としては、パンチェンや乾隆帝を描いた絵画、パンチェンをもてなすために建立された数々の寺廟、パンチェンから乾隆帝へ献上された法具、珍宝類等の諸文物がある。⁽⁶⁾ 廟は熱河の須彌福壽廟(Tib. bkra shis lhun po, Man. jasilunbo)、香山の昭廟(Tib. jo bo lha khang, Man. joo juktehen)、北京雍和宮内の班禅樓並びに戒台樓、西黃寺を始めとする建造物が特に有名である。

これらの同時代史料はそれぞれ異なった視点によって記されたものであり、それぞれ補い合うことによってよりよく理解することが可能になるものである。例えば、『内務府奏銷』は基本的に月の記載がなく日付も順不同なので、チベット史料と対照して初めて文書の月数が判明する。また、次節で言及するように『起居注』に記されている皇帝の所在の記載はチベット史料におけるパンチェンの行動と対照させると、『起居注』における情報の取捨選択の方針が明らかとなり大変興味深いものである。まず、次節において、これらの史料からパンチェンと皇帝の会見の実相について明らかにしたい。

3. チベット文と満漢史料の比較対照から見たパンチェンの訪清日程

3.1. 『起居注』『実録』から見たパンチェンの訪清

皇帝の一日の行動を記録した『起居注』と、皇帝の代替りごとに編纂された『実録』は皇帝の行動を研究する際には基本史料となるものである。そこでまず、乾隆帝の『起居注』『実録』においてパンチェンの訪清期間中の乾隆帝の行動を見ていき⁽⁷⁾たい。以下はパンチェンの名前が直接見られるもの、また、パン

(6) これらの文物のうちいくつかは北京の故宮博物院の常設展で目にすることが可能であり、『西藏文物精粹』『清宮藏伝佛教文物』等の写真集に納められている。

(7) 現在北京の第一歴史檔案館に所蔵されている乾隆四十五年の起居注は漢文のもののみで満文は残されていない。従って本稿では漢文起居注を用いた。

チェンの滞在していた寺廟の名前が見られる記事を両史料から要約抜粋したものである。『起居注』を中心に採録してあり、『起居注』と『実録』が重複している場合は『起居注』のみを採録した。『実録』にしか記載がないものは『実録』のみを挙げた。〔 〕内が『実録』の記述である。

乾隆四十五年

七月二十一日 班禪額爾德尼自後藏來，恭祝萬壽。至避暑山莊於澹泊敬誠殿丹墀，跪請聖安。上於依清曠殿賜座慰問，賜茶果。上詣宝筏喻，煙波致爽，雲山勝地各仏堂，拈香。班禪額爾德尼從。禮畢，上還宮。是日駐畢承德行宮。

七月二十二日 上詣須彌福壽廟，拈香。

〔七月二十四日（庚子）上御萬樹園大輦次，賜班禪額爾德尼及扈從王，公，大臣，蒙古王，公，貝勒，額駙，台吉，杜爾伯特親王車凌烏巴什，土爾扈特貝子沙喇扣肯及回部阿奇木伯克貝子色提巴爾第等十一人，喀什噶爾四品噶匝納齊伯克愛達爾之子烏魯克等三人，金川木坪宣慰司嘉勒燦囊康等四十四人宴。賞資冠服金銀緞匹，有差。〕

〔七月二十五日（辛丑）杜爾伯特汗瑪克蘇爾扎布等四人，土爾扈特郡王色楞等二人入覲。上御卷阿勝境，召見。並同班禪額爾德尼及扈從王，公，大臣，蒙古王，公，貝勒，額駙，台吉，杜爾伯特親王車凌烏巴什，土爾扈特貝子沙喇扣肯及回部阿奇木伯克貝子色提巴爾第等十一人，喀什噶爾四品噶匝納齊伯克愛達爾之子烏魯克等三人，金川木坪宣慰司嘉勒燦囊康等四十四人，賜食。〕

八月六日 上詣須彌福壽廟，拈香。

八月八日 上詣普陀宗乘廟，拈香。

八月十一日 上御避暑山莊宮門，土爾扈特漢策凌那木札爾等七人，及朝鮮正使錦城尉朴明源等三人，同時入，恭祝萬壽，跪請聖安。

(8) 澹泊敬誠殿と依清曠殿は熱河行宮中公式の用に使われる建物であり，煙波致爽殿と雲山勝地樓は皇帝の日常の居殿である（『北京歴史地図集』p.49）。

〔八月十二日（戊午）上御卷阿勝境，賜班禪額爾德尼及扈從王，公，大臣，蒙古王，公，貝勒，額駙，台吉，杜爾伯特汗瑪克蘇爾扎布等五人，土爾扈特汗策凌納木扎勒等九人，烏梁海散秩大臣伊素特等三人，回部郡王霍集斯等及阿奇木伯克貝子色提巴爾第等十一人，喀什噶爾四品噶匝納齊伯克愛達爾之子烏魯克等三人，朝鮮使臣錦城尉朴明源等三人，金川木坪宣慰司嘉勒燦囊康等四十四人宴。〕

八月十三日 萬壽聖節。上御澹泊敬誠殿，受王公大臣，官員，及蒙古王公，貝勒，額駙，台吉，回部郡王霍集斯等，並阿奇木伯克，貝子色提布阿爾第十一，杜爾伯特漢瑪克蘇爾札布等九人，朝鮮正使錦城尉朴明源等三人，悟梁海散秩大臣伊素特等三人，喀什噶爾四品噶匝納齊伯克愛達爾之子烏魯克等三人，木坪宣慰司堅木參囊康等四十四人慶賀禮。禮畢，並命隨至卷阿勝境，賜茶果。

⁹⁾〔八月二十八日（甲戌）勅諭班禪額爾德尼曰「爾以朕七旬萬壽來京祝嘏，朕詢及達賴喇嘛呼畢勒罕學業，爾奏稱，「呼畢勒罕年現長成，深明經典」朕聞，不勝欣喜。特派大臣呼圖克圖，齎持金冊往封。茲以爾教訓呼畢勒罕，學習經典，奉持清戒，廣揚釋教，使番民蒙福，朕甚嘉焉。故特頒賞幣物，爾其祇受，嗣後宜仰體朕心。扶持達賴喇嘛，大興黃教，為天朝億萬年延洪稱慶。特諭。⁹⁾〕

九月七日 上恭謁昭西陵，孝陵，孝東陵，景陵……駐蹕桃花寺，拈香。

九月十日 上至德壽寺，拈香。駐蹕旧衙門。

九月十六日 上恭謁泰陵。駕未至碑亭，即降輿步入降恩門，至降恩殿，上香，詣寶城前，行禮。

九月十九日 上詣宗鏡大昭之廟，拈香。是日駐蹕靜宜園。

九月二十日 上至靜明園仁育宮，拈香。詣安仿宮，行禮。駐蹕圓明園。

九月二十一日 上詣思慕寺永寧寺，拈香。

(9) この記事は『起居注』にはないが『滿文上諭檔』八月二十八日に全文の記載がある。

九月二十五日 上詣大高玄殿，壽皇殿，拈香，行禮。

九月二十六日 上詣雍和宮，西黃寺，弘仁寺，壽康宮，拈香。

十月三日 上御保和殿，賜班禪額爾德尼並章嘉胡圖克圖等宴。賞賚綵緞等物有差。

十月八日 上詣弘仁寺，仁壽寺，極樂世界，拈香。

十月二十二日 上詣雍和宮，闡福寺，拈香。

十一月一日～七日 大高玄殿拈香。

まず目につくのは『起居注』と『実録』の齟齬である。七月二十四日，七月二十五日，八月十二日の三日は『実録』には皇帝とパンチェンとの会見の記述があるのに『起居注』には存在しない。また，乾隆帝の誕生日である八月十三日その日に『起居注』『実録』ともにパンチェンの名が挙げられていない。パンチェン来錫の目的は乾隆帝七十寿の賀の祝福であったのだから奇妙なことである。また，『起居注』『実録』におけるパンチェンに言及した史料を見る限り，パンチェンと乾隆帝の交流は非常に簡単なものであったように見受けられる。しかし，事実は全く逆である。次節ではパンチェンの行動から乾隆帝との会見の様相を検討する。

3.2. チベット史料から見たパンチェンの訪清

以下に提示したのは『パンチェン四世伝』(P4N)に基づいて作成したパンチェン訪清の日程表である。記述の整理の基準は皇帝との会見の有無を中心にしてある。会見が行なわれた日には★印を付し，皇帝がパンチェンに問安の使者を派遣したと記述のある日には☆印を付した。

★七月二十一(二十二)⁽¹⁰⁾日(168b3)パンチェン，熱河行宮にて乾隆帝と初会見。

(10) P4Nには七月二十一日の記事がなく，二十二日の記事が二回現れるので，最初の二十二日を二十一日と訂正した。同じ事は九月十九日についても言える。

★七月二十二日 (178a5) 皇帝、須彌福壽廟を訪問しパンチェンの長寿祈願を行なう。

☆七月二十三日 (183a5) 六皇子、五公主、八皇子、十一皇子、須彌福壽廟にパンチェンを訪問。

★七月二十四日 (185b6) 皇帝とパンチェン、萬樹園の大テントで宴会。

☆七月二十五日 (190a3) 皇帝の言葉により宮中で観劇。

七月二十六日 (193a5) パンチェン、普陀宗乘之廟にて皇帝の長寿と政治の祈願を行う。千人に手灌頂を授ける。

☆七月二十七日 (193b6) 皇帝から使者、殊像寺に招かれ祝福を授ける。

★七月二十九日 (194b4) 普寧寺の宗教舞踏劇 ('chams) に皇帝とともに臨席する。

☆八月一日 (195b2) 皇帝、パンチェンに自分の食事を届け、ついで数珠の加持を願う。

☆八月三日 (196a4) 皇帝、パンチェンに玉印を授与。

☆八月四日 (197b3) 皇帝の言葉により宮中で観劇。

☆八月五日 (197b4) 普寧寺、普陀宗乘之廟、溥善寺、溥仁寺、普佑寺、安遠廟等熱河の十寺の資金提供のもと、須彌福壽廟でパンチェンが導師となって法要を挙行。

★八月六日 (198b5) 皇帝の資金提供のもと須彌福壽廟で祈願会を挙行。パンチェンの随員の中から須彌福壽廟の運営のために数名を残す事を決定。

★八月七日 (201a4) 皇帝臨席のもとパンチェンが導師となって皇帝のための長寿儀軌を宮中で修法。

★八月八日 (206a5) 普陀宗乘之廟でパンチェンと皇帝法要。

☆八月十日 (207a4) 宮中より問安の使者とともにカターと皇帝の食物が送られて来る。

八月十一日 (207b3) 朝鮮使節と須彌福壽廟にて会見。

☆八月十二日 (208b4) 皇帝の言葉によって宮中で観劇。溥仁寺、十地寺、普

佑寺，普樂寺，安遠廟を拝観して須彌福壽廟へ帰還。

★八月十三日 (209a5) 万寿節当日．皇帝臨席のもと，パンチェン，チャン
キャが長寿儀軌を宮中で修法。

★八月十四日 (211a5) 皇帝とパンチェン，萬樹園に黄色いテントをはって宴
会。

☆八月十五日 (214b2) 皇帝の使者，浄土マンダラ，金瓶等を布施。

★八月十六日 (214b6) 皇帝とともに宮中で観劇。

☆八月十七日 (215a5) 殊像寺においてハルハ，ジュンガル，ハラチン，ホル
チン等の472人に具足戒．千人に手灌頂を授ける．皇帝から聖安の使い。

★八月十八日 (215b4) 宮中で内廷のラマと皇帝に会う．白チャクラサンヴァラ⁽¹¹⁾
の長寿儀式を行なう。

★八月十九日 (216b2) 皇帝とパンチェン，宮園のテントで宴会。

☆八月二十日 (219a1) 皇帝の使者，カター，金椀等を布施。

八月二十一日 (219a4) 須彌福壽廟の最後方に位置する瑠璃宝塔の拝観．乾
隆帝の転生譜を折り込んだ長寿祈願を著作。

★八月二十二日 (219b3) 須彌福壽廟の経呪の儀軌をうちたてるべく刷新した
人事のもと，金剛怖畏の我生法等を行う．皇帝の使者，青金石の鉢，金瓶
等を布施．普寧寺，溥善寺を拝観。

☆八月二十三日 (220b3) 皇帝の父の供養のために第六皇子とチャンキャに
よって須彌福壽廟の法要の導師に招かれる。

★八月二十四日 (221a4) 皇帝が須彌福壽廟へ来て北京での予定を告げる。

八月二十五日 (222b5) 須彌福壽廟を出発．北京に向かう。

九月一日 (223b6) 北京の黄寺へ到着．チャンキャの訪問を受ける。

☆九月二日 (224b4) 第六皇子訪問．黄寺の僧の供養を受ける。

☆九月三日 (225a2) 圓明園に行き園内外の寺を祝福．熱河の乾隆帝よりドラ

(11) Skt. cakrasamvara, Tib. bde mchog. 通常，勝樂タントラと和訳される。

イに送る勅書の写しが送られて来る。圓明園泊。

九月四日 (227a1) 園中の諸仏堂を祝福。圓明園泊。

九月五日 (227b2) 圓明園より黄寺へ帰還。

九月六日 (229b2) 黄寺において三千人と会見。

☆九月八日 (230a1) 北京の南にある南苑で東陵から西陵へ向かう途上の皇帝を迎えるため、パンチェンは黄寺を出発。南苑内永慕寺泊。

★九月九日 (231a1) 皇帝と南苑で会合。

九月十日 (231b1) 皇帝は西陵へ参拝。パンチェンは黄寺へ帰還。

九月十二日 (231b4) 第六皇子とチャンキヤが扈從して、安定門、神武門を通過して紫禁城内の寺を巡礼。黄寺に帰還。

☆九月十三日 (233a4) 安定門を経由して雍和宮、永安寺の白塔を祝福。皇帝は第六皇子とチャンキヤを通じてチベットのタシルンボ寺に御筆の額を贈る旨を伝える。城内泊。

☆九月十四日 (234a2) 弘仁寺において皇帝の長寿祈願法要。白傘寺、浄土寺等を拝観。黄寺に帰還。

九月十五日 (236b2) 第六皇子とチャンキヤとともに徳勝門、西直門をぬけて筏で萬壽山へ巡礼。

九月十六日 (238a2) 萬壽山の裏にある四大部洲を拝観して昭廟へ行く。

九月十七日 (238b3) 昭廟落慶のために前行を修す。

★九月十八日 (238b5) 西陵から帰還した皇帝臨席のもと昭廟のシャカムニ仏の御前で昭廟を落慶。夜半、皇帝からテモトゥルクの化身の認定を頼まれる。

☆九月十九 (二十) 日 (239b2) パンチェン、テモトゥルクの認定承認の手紙を皇帝に出す。香山の中にある諸寺を第六皇子とチャンキヤとともに訪問し祝福。皇帝より昭廟落慶の布施としてカター、服等を賜る。⁽¹²⁾

(12) 布施の品目は『内務府奏銷』 no. 362, pp. 140-143 に詳しい。

- ★九月二十日 (240a6) 圓明園で皇帝と会見．黄寺に帰還する．
- ★九月二十四日 (241a3) 圓明園から北京に帰京した皇帝を中正殿で迎える．
黄寺に帰還する．
- ★九月二十五日 (241b2) 皇帝，黄寺にパンチェンを訪問．
- ☆十月一日 (242b3) 皇帝，満州語の『般若波羅蜜多經』を布施．
- ☆十月二日 (243a2) 皇帝の使者，パンチェンの従者に冬の帽子を贈る．
- ★十月三日 (243a3) 皇帝とパンチェン，保和殿にて宴会．
- ☆十月四日 (245a5) 皇帝の使者，数珠，金腕を布施．
- ☆十月五日 (245b1) 皇帝，絵師を派遣してパンチェンの肖像を描かせる．⁽¹³⁾
- ☆十月六日 (246a1) 皇帝の使者，カターや金剛鈴を布施．
- ★十月八日 (246a4) 徳勝門經由で皇城内に．梅檀仏の御前で皇帝臨席のもと
1000人規模の集会の導師となって法要．黄寺に帰還．
- ☆十月十一日 (247a4) 皇帝より使者．
- ☆十月十四日 (247b4) 皇帝から明朝時代の観音の仏画が送られる．雍和宮，
弘仁寺，嵩祝寺等北京二十八ヵ寺と提携して乾隆帝の健康と政治とゲルク
派の発展を祈る祈願法要を挙行．
- ☆十月十五日 (248b2) 皇帝，第六皇子を通じて，冬の住居についての提案を
する．
- ★十月二十二日 (249b4) 雍和宮の集会殿に招聘されて皇帝臨席のもと2000人
規模の法要．皇帝の長寿と政治の繁栄を祈願．黄寺に帰還．
- ☆十月二十四日 (251b3) 発病．
十月二十六日 (252b1) 安定門經由で嵩祝寺を訪問しチャンキャに授法．
- ★十月二十七日 (254b3) 皇帝，黄寺にパンチェンを訪問．
- ☆十月二十八日 (258b6) チャンキャ，第六皇子その他パンチェンを見舞う．

(13) この時描かれたと思われる肖像は『清宮藏傳佛教文物』(pp. 33-34) に収録されている．

★十月二十九日 (261b1) 皇帝、パンチェンに医者を派遣し自らも見舞う。

☆十月三十日 (263a4) チャンキヤと第六皇子、パンチェンの病氣快癒祈願の法要を北京の諸寺に行なわせる。

☆十一月一日 (264a3) 戌時、パンチェン円寂。⁽¹⁴⁾

以上の略日程を見ると『起居注』において皇帝が須彌福壽廟（七月二十二日、八月六日）、普陀宗乘之廟（八月八日）、德壽寺⁽¹⁵⁾（九月十日〔九日〕）、昭廟（九月十九日〔十八日〕）、大高玄殿（九月二十五日〔二十四日〕）、雍和宮・西黃寺（九月二十六日〔二十五日〕）、弘仁寺（十月八日）、雍和宮（十月二十二日）へ行幸したとのみ記されている場合でも、その地において乾隆帝とパンチェンが会見していたこと、回数だけをとっていても乾隆帝とパンチェンは三ヶ月の間、少なくとも二十回は実際に会っていたこと、また、会合のなかった日にも皇帝からの使者が往来し問安・布施が行なわれていたこと等が解る。また、『起居注』『実録』両者にパンチェンの名の記載がある場合は（七月二十一日、十月三日）チベット史料からも乾隆帝とパンチェンの会合を確認することができるが、『実録』のみにしか言及のない日（七月二十四日、七月二十五日、八月十二日）においては七月二十四日を除けばチベット史料に皇帝との会見記事は存在しない。従って会見の存在は疑問視されよう。

次に、パンチェン伝には記載されており、『実録』『起居注』等には記載されていない両者の直接の会見（普寧寺七月二十九日、宮中八月七日、八月十三日、萬樹園八月十四日、宮中八月十六日、八月十八日、八月十九日、須彌福壽廟八月二十二日、八月二十四日、西黃寺十月二十七日）に注目する。これらの日々にパンチェンは万寿節に参加した他の王侯とは別に、法要や観劇を行っていた。

(14) 『内務府奏銷』no. 361, p. 66 にパンチェン死亡時の漢方医の報告が収録されている。

(15) 旧衙門の東南に德壽寺が、東北に永慕寺がある（『北京歴史地図集』p. 38）。

(16) [] 内はチベット暦の日数である。チベット暦では八月が三十日まであり、漢暦では二十九日までしかないために九月の日程はチベット暦と漢暦では一日ずつずれる。

例えば万寿節の行なわれた八月十三日はパンチェンの名は『起居注』にも『実録』にも見えない。この日の『実録』の条項には、官吏を派遣して諸廟、諸陵を祭り、『実録』に名前が見られる内外の王侯官吏によって慶賀の礼が行なわれる等、例年とほとんど同じ記載がなされている。この記述を見る限りでは万寿節の行事は皇帝が臣下の慶賀の礼を受けるという非常に中国的な儀礼が中心であったように見える。しかしチベット史料にはこの日パンチェンは皇帝臨席のもと宮中において、内廷のラマとともに長寿儀軌を修法していたことが記されている。

つまり、『起居注』『実録』には皇帝の行動の中でも儒教儀礼にのっとっていたもののみが記事として採録されており、中華帝国の理念から逸脱した「異例」な会見や儀礼は無視されていたことが解るのである。このことから単純に、仏教の法要は政務とは異なる私的なことであった故に採録されなかった、従って研究する程の重要性はない、と結論づけることはできない。以下本稿に述べるように乾隆帝がパンチェンとの会見の際に行なった行動は朝鮮使節を始めとし多くの人々の目で行なわれたものであった。また、それは他の王侯に対するものとも大きく異なったものであった。乾隆帝がパンチェンとの会見でとった行動は当人の意図はどうであれ臣下の目に映る皇帝像の一面を形成することになっていたのである。清朝国家の性質を考える上でも、漢文史料から意図的に排除されたチベット仏教文化の世界を復元することは十分に意味を有する作業と言えよう。

4. パンチェンの訪清間の活動、並びに、乾隆帝の対応

4.1. パンチェンの訪清間の活動

本章では、パンチェンと乾隆帝の行動を諸側面から明らかにしていきたい。パンチェンの清朝滞在期間になされた行動は五種類に整理できる。

(a) 皇帝のために長寿や政治の繁栄を祈願する法要の挙行

パンチェン訪清の目的はこの長寿儀軌の修法にある。長寿儀軌は八月七日と

乾隆帝の誕生日の八月十三日の両日に行なわれたが、八月七日のものが記述も詳しく最も重要な儀式であったと見られる。この八月七日の法要の詳細については第5節で注解する。

(b) 諸寺廟の祝福

パンチェンは皇帝の求めに応じて (P4N, 221b1-222a1), 熱河滞在の期間は熱河に存在する諸寺を、北京滞在の間には、紫禁城、並びに皇城 (弘仁寺、雍和宮 etc.), 西苑 (圓明園, 清宜園に存在する諸寺院) の諸寺を訪問した。その際パンチェンは寺内の仏像を供養し、皇帝の御座にカターを献じて祝福し、法要の導師を勤める等のことをした。

(c) 昭廟落慶

北京滞在中の最大の行事がこの昭廟落慶である。昭廟はパンチェンの来錫を記念してチベットの都ラサの中心に位置する仏殿、通称ジョカン (Tib. 'phrul snang, Chn. 大昭寺) にならって建立されたものである。⁽¹⁷⁾ 九月十九日に行なわれた落慶法要には皇帝も臨席し、その時降った雨は吉祥の華の雨と見なされ、⁽¹⁸⁾ 記念の碑文が建立されている。⁽¹⁹⁾

(d) 伝法活動

皇帝が出御する前の宴席や黄寺等でパンチェンは内外のモンゴル王公や満漢官吏並びに、千人単位の民衆に謁見をし灌頂や授法を行なっている。また、内外のモンゴル人、チベット人沙弥への授戒も数百人単位で行なっていた (P4N, passim)。

(e) 宗派内事務

以上の伝法活動に加えて、パンチェンは寺廟の機構の整頓、化身の認定、ダラ

(17) ジョカンには唐の文成公主が中国から将来したシャカムニ仏 (jōbo) がまつられており、ラサ随一の聖地となっている。

(18) 九月二十二日の奏銷に、パンチェンとチャンキヤが衆ラマを率いて謝恩した際に、十九日の落慶供養の際、皇帝が現れた時丁度雨が降り始めたことに触れ、皇帝の誠が天を動かしたとし、吉兆であると述べた旨が記されている (『内務府奏銷』 no. 361, 九月二十二日)。

(19) 註 (5) 参照。

イラマの冊封等、宗教的ではあるものの多少政治色の強い事務を行なっている。

まず、八月六日には熱河の須彌福壽廟の役職者の任命を行ない、学問のシステムを確立した(P4N, 199b4-200a3, 217b1-6)。これはゲルク派が新しく僧院を建立する際に普通に行なわれる手順である。

八月十四日の宴会の席上で乾隆帝はダライラマの冊封をパンチェンに提案した。時のダライラマ八世ジャムペー・ギャムツォ('jam dpal rgya mtsho)は当時二十二才であり、パンチェン四世を師としていた。⁽²⁰⁾そのような背景から八月十四日の宴会の際に乾隆帝はパンチェンにダライラマの学問の進展度を詳しく問うており、パンチェンも具体的な経書の名前を挙げてそれに答えている。そして乾隆帝はパンチェンに、かつて前世の諸ダライラマが中国皇帝から封冊を受けていたように、八世ダライラマにも封冊を授けることを提案した。パンチェンはそれに同意し(P4N, 213a3-214b1)、九月三日には乾隆帝からパンチェンへダライラマ封冊の勅書の写しが送られてきた(P4N, 225a4-b4)。パンチェンの閲覧を経てダライラマを冊封する上諭が下されたのは十月十日のことであった。その内容の全文は『滿文上諭檔』に納められている。これによると乾隆帝はパンチェンから聞いたダライラマの学問の進歩を賞賛した上で、先代のダライラマのように仏教の興隆を行ない、チベットの僧俗の民に泰平をもたらすことを要請して金印、金冊を贈ると述べ、また、「チベット方面の全ての事を配下の大臣(bka' blon)を統率して、ともに相談してよく処理し、駐藏大臣を通じて私に上奏するなら、チベットの事に利益が大きい」と述べている。⁽²¹⁾また、九月十八日には内廷のラマ、テモトゥルク(Tib. de mo sprul sku, Chn. 第穆胡圖克圖)の化身認定作業にも関与している(P4N, 239a4-b6)。

さらに、現在残されているチベット史料並びに満漢の檔案に至るまで、両者の会見の席上で行なわれていた会話は全て宗教に関したものであった。全ての

(20) チベットではダライラマが幼少の折はパンチェンが、パンチェンが幼少の時にはダライラマが宗教上の師となるのが通例である。

(21) この上諭の抄文は『実録』にも採録されている(『実録』巻千百十六, 17ab)。

例を挙げることは不可能であるが、例えば、内務府の奏銷にも皇帝がパンチェンに問安を行なう際に、パンチェンの将来した仏像の起源を問うていた旨を伝える文書が残されている（『内務府奏銷』no. 362, p. 456, 十月一日）。

以上のことから、パンチェンの活動内容は現在の史料から見る限り、公私にわたり仏教色一色であったことを知ることができる。さらに乾隆帝側の公式の対応を以下に見て行きたい。

4. 2. 乾隆帝の対応

乾隆帝はパンチェンに対して、外藩のどの国の王侯とも異なる異例の厚遇を与えていた。これらの接待内容はパンチェンと乾隆帝の関係を考える上で非常に示唆に富むものである。以下に従来の指摘に新しい項目を加えてその内容について検討していきたい。

パンチェンが訪清の道中において、また、中国に到着して以後、熱河や北京の宮城内を移動する際に使用していた輿は皇帝所用のものであった（P4N. 169b5, 170a5-b3, 175a4. 張羽新 1988, p. 120）。パンチェンが輿に乗って宮中へ出入する際には皇帝の行幸の際と同じ音楽が奏せられ、同じ鹵簿が陳列されていた（P4N. 171a1-3, 176b2-4, 230a2-4）。

パンチェンが中国に滞在する期間起居する寺として、熱河にはパンチェンのチベットでの座牀寺タシルンポ（bkra shis lhun po）にならって建立された須彌福壽廟、北京ではこれもパンチェンの接待のために特別に建立された西黃寺が用意された。これらの両寺にはいづれも皇帝の居住する家屋のみに許された金瓦⁽²²⁾が使用されていた。

また、熱河に到着して初めて乾隆帝と会見した日から死に至るまで、パンチェンは乾隆帝に対して一回も叩頭を行なっていない（P4N. 171b5-6）。皇帝に対して公式に謝恩を行なう際にもパンチェンは叩頭を行なうことを免除されて

(22) 黄金之屋今皇帝之所不能居也。彼班禪何人者晏然而據之乎（『熱河日記』「班禪始末」7b）。

いた(九月二十日の昭廟落慶後の謝恩の際も(『内務府奏銷』no.361, 九月二十二日), 十月三日の保和殿の宴会後の謝恩の際も(『内務府奏銷』no. 362, pp. 489-491, 十月五日), パンチェンが跪こうとすると「臣, 永貴はすぐにパンチェンエルデニを助けて立たせた(wakiyame ilibuha)」とある。叩頭は臣下が皇帝に拝礼するに際して必ず行なうものであるから, パンチェンは臣礼をとることが必要とみなされていなかったことになる。そのかわり二人は会見のたびごとにその最初にカターを交わして挨拶を行っていた。カター(Tib. kha btags, lha rdzas; Chn. 哈達)とは白い絹のスカーフであり, この布を交わすことによって高位の人に挨拶を行なうことは現在もチベット人の挨拶儀礼として生活に根付いているものである。⁽²³⁾

皇帝とパンチェンは同じ高さの座についていた(P4N, 201b4-5)。ある箇所ではそれは一つの座席(bzhugs khri)に二つの褥(bzhugs gdan)をしつらえていたと表現されている⁽²⁴⁾(P4N, 172a2-3, 174a2-3, 179a3, 199b1, 221a6-b1)。

また, 他民族の王侯を交えた宴席においてもパンチェンは常に皇帝の一番近くに同じ高さの座につき, 皇帝は南面, パンチェンは東面していた(P4N, 186b1-4, 212a1-2)。八月十一日に朝鮮使節がパンチェンと会見した時にはパンチェンは南面していた⁽²⁵⁾。この東面の解釈については後述する。そして, 着座も御茶を口にするのも同時であった(P4N, 173a6, 181a1-5, 187a2-3)。

また, パンチェンは皇帝の入退場に際して送迎の労をとることを免じられていた⁽²⁶⁾(P4N, 178b3-4, 182b1, 196b2, 243b1-2; 張羽新 1988, p. 121), 逆にパンチェンが皇帝を訪問する場合には, 皇帝のいる部屋の控えの間(gzims chung

(23) 見班禪者必執帕為禮。而皇帝每見必執黃帕云(『熱河日記』「扎什倫布」2b)。

(24) 皇帝冠無頂紅絲帽子衣黑衣, 坐織金厚褥盤股坐。班禪戴金笠衣黃衣, 坐織金厚褥跏趺稍東前。坐一榻兩褥膝相聯也。數々傾身相語々, 時必兩相帶笑含歡, 數々進茶(『熱河日記』「扎什倫布」5a)。

(25) 班禪跏趺南向坐(『熱河日記』「扎什倫布」2a)。

(26) 千官班立時, 班禪獨先坐坐榻上。……皇帝雖四五間降輿疾趨至, 兩手執班禪手, 兩相搖擲相視笑語。(『熱河日記』「扎什倫布」4b-5a)。

nang ma'i 'gag) まで輿に乗ったまま入場することができた (P4N, 171a5-6, 190b3-4, 201b3-4)。百官が宮中に入る際には、門前の下馬碑のところで全員が下馬して歩かねばならなかったことを思うと、これは破格の厚遇である。

さらに、乾隆帝は臣下をしてパンチェンに臣礼をとらしめていた。パンチェンが熱河に到着した日、パンチェンは孔雀の羽飾を帽子につけた内廷の大臣 (nang gi blon po che chung) や官吏に騎馬で迎接された。一行はパンチェンのもとに到着すると扈従のものとともに下馬して三回叩頭を行ない対面のカターを献じ、灌頂を願っていた (P4N, 168b3-5)。三回の叩頭とは皇帝に対する礼と同じものである。『熱河日記』にも宴席でパンチェンが人々から叩頭を受けていた様が目撃されている。⁽²⁷⁾ また、乾隆帝は万寿節を祝うため八月十一日に入観した朝鮮使節をその日のうちにパンチェンに会見させた (P4N, 207b6-208a4)。『熱河日記』によると、朝鮮使節は、この会見の際にパンチェンに対して拝叩の礼を行うよう要請されたが、「拝叩は天子に行うべきもので、異国の僧におこなうつもりはない」とこれを強く拒否した。しかし軍機大臣は、皇帝や皇太子もパンチェンに叩頭していることを述べた上で重ねて叩頭を要請し、さらに礼部の役人が帽子を床に投げ付ける等して激高したために、朝鮮使節は仕方なく会見に望んだことが記されている。

軍機大臣初言、「皇上也叩頭，皇六子也叩頭，和碩額附也叩頭。今使臣當行拜叩。」使臣朝既争之禮部。曰「拜叩之禮，行之天子之庭。今奈何以敬天子之禮，施之番僧乎。」争言不已。禮部曰「皇上遇之以師禮。使臣奉皇詔禮宜如之。」使臣不肯去，堅立争甚力。尚書德保怒，脱帽，擲地，投身，仰臥炕上，高聲曰，「亟去亟去」手麾使臣出。今軍機有言而使臣若不聞也，提督引使臣。至班禪前 (『熱河日記』「扎什倫布」2b-3a)。

さらに、同日記によると軍機大臣はパンチェンに従う時には僧服に着替えて

(27) 一品輔國公輩及廷臣貴顯者多趨至榻下，脱帽叩頭。班禪皆親手為。一摩頂則起出 (『熱河日記』「扎什倫布」4b-5a)。

(28) いた。また、現在まで残されている乾隆帝の肖像画等から推測すると、乾隆帝も儀礼の際には僧服を着用していた可能性が高い。⁽²⁹⁾

パンチェンに対する乾隆帝の厚遇を示すその他の有名な逸話としては、乾隆帝はパンチェンとの会見に備えてチベット語の日常会話をチャンキャより学んでいたこと (P4N, 182a4-5; 張羽新 1988, p. 121; 郭美蘭 1992, p. 145), 当時もっとも乾隆帝の寵愛を受けていた第六皇子と第五公主、並びにチャンキャ大國師を接待 (zhabs phyi) にあてていたこと等が挙げられる (P4N, *passim*; 張羽新 1989, pp. 73-74)。

4. 3. 人々の反応

このように、パンチェンは皇帝所用の輿に乗り、皇帝と同じ坐に着き、皇帝と同じ金瓦を葺いた広大な殿宇に滞在し、皇帝と同じく叩頭を受け、皇帝と親しく手を取り合って談笑していた。パンチェンに認められていたこのような礼は素直に見る限り皇帝とパンチェンを対等に見せることを配慮していたように思われる。⁽³⁰⁾

ではパンチェンに対する厚遇は当時の人々にどのように受け取られていたのであろうか。『パンチェン四世伝』には無論のこと、『熱河日記』にもパンチェンの靈驗にあやかろうと漢・満・蒙の数千人の人々が熱狂していたことが記されている。

しかし、一方では乾隆帝のパンチェンに対する厚遇を批判する人々も存在した。前述の朝鮮使節のパンチェンに対する抗礼もパンチェンに対する批判と見てよいであろう。また『熱河日記』によると、山西省の士人が、チベットの高僧

(28) 二喇嘛立侍于右，軍機大臣立喇嘛下。軍機大臣侍皇帝則衣黃。侍班禪則易喇嘛服 (『熱河日記』「扎什倫布」2ab; 張羽新 1989, p. 192)。

(29) 雍和宮の戒台樓所藏の乾隆帝像を始めとして、乾隆帝の僧服図は数多く残されている (『清宮藏傳佛教美術』p. 57; 『雍和宮』p. 26)。

(30) 『熱河日記』には乾隆帝はパンチェンに「師礼」をとっていたと記されている：禮部曰，皇上遇之以師禮。(『扎什倫布』3a; 張羽新 1988, p. 121)。

に対して厚遇をしすぎる、土木事業が多すぎる等の条項を皇帝に上書して逆鱗に触れ、死刑に処された逸話が記されている。同じ事件は『朝鮮李朝実録』の同年十一月丁丑の条にも記されており、多少詳しいものとなっている。

余與高太史諸人，飲酒段家樓。高太史語班禪事，方發端。座有憑生者，目止之。余甚怪之。久之聞山西布衣有以七条上疏者。其一盛論班禪。帝怒命局之。我東驛夫多見之宣武門外者，自是不敢復詢班禪事（『熱河日記』「班禪始末」7ab）。

一、臣於燕京離發前數日，聞有罪人之刷鬻於順直門外者，使任譯探問則山西省士人上書行在，論七條，皆是直陳闕失，而其中三條即土木之不息也，巡遊之無節也，蕃僧之過禮也。皇帝震怒即付在京刑部，生而鬻割之。書本秘不宣布，姓名亦無傳說（『正祖實録』卷十 44b；張羽新 1988, p. 201）。

これらのパンチェンに対する批判の内容を検討すると、批判した人物が皆儒教思想をエートスとしている人々であることに気付く。儒教思想に基づけば、乾隆帝とパンチェンの間に存在した対等の関係は許しがたいこととなる。儒教思想に二人の皇帝は存在する余地はないからである。しかし、一方の乾隆帝は一切の批判を許さず、パンチェンと並びたつことにとまどいをおぼえていたようなふしはない。また、パンチェンのもとに熱狂して集まる満・漢の王侯・官吏も現実に存在していたのである。これは乾隆帝とパンチェンの関係を説明するものとして、儒教とは別の、二人の王の存在を奇異なこととさせない別の思想が存在したと見なければ説明がつかないものである。

前節において述べたとおり、パンチェンの中国における活動は仏教色一色であった。また、乾隆帝は挨拶、言語、服飾等、礼の中でもかなり重要な部分をチベット仏教の儀礼体系にあわせていた。これらのことから、乾隆帝とパンチェンの対等な関係の背後には仏教思想に基づいた独自の価値体系があったことを推測することができよう。以下にパンチェン訪清のハイライトである八月七日の長寿儀軌法要の詳細を『パンチェンラマ四世伝』から翻訳注解しつつ、その史料をもとにして皇帝とパンチェンの会見の背景にあったチベット仏教の世

界について説明していきたい。

5. 会見の背景にある仏教思想

5.1. 八月七日の仏教儀礼訳注

以下は『パンチェンラマ四世伝』(P4N)の四月八日の記事の大部分に訳注を附したものである。文中の()内には行数が示されている。フォリオのかわりめにはフォリオ数も示した。

(201a4) 八月の七日の星辰の配置が良い円満の日に、文殊皇帝が御年七十才になられた万寿節の大宴に合わせて大皇帝に (5) 長寿儀軌 (zhabs brtan) を献ずるべく、最勝なる主ラマ (パンチェン) は皇太子殿下、チャンキャ・リンポチェ等のラマ達と軍機大臣 (sne shan am pan), 主ラマに随従するソルボン⁽³¹⁾ (gsol dpon)・カンチェン・ケンポ (gangs can mkhan po), シムボン⁽³²⁾ (gzims dpon)・ゲロン・ロサンラブ (6) テン (dge slong blo bzang rab brtan), トンニエル⁽³³⁾ (mgron gnyer) 等 [パンチェン] 御付きの十五司 (以下随行したラマの名前は略す) (201b1) とともに、須彌福壽廟 (bkra shis lhun po) から熱河宮 (zhe hor pho brang) (2) の中に出御して、宮門 (rgyal sgo) の内側にわたられると、宦官等が輿の椅子にお招きした。執金剛チャンキャも輿に (乗り), 第六皇子と御付きのもの達も馬に乗ったままで良いとの (3) 許可を頂いて、宮内にある庭園の湖岸にまでいらっしゃられた。それから湖上の船に招じいられた。対岸に付くと、主ラマは皇帝のおられる部屋の中の小部屋 (gzims chung nang ma) まで、主チャンキャ・リン (4) ポチェは外の小部屋 (gzims chung phyi mas) の控えの間 ('gag) まで輿で乗り入れられて、最勝の施主 (乾隆帝) と帰依僧 (パンチェン) のお二人は中の小部屋の控えの間でご挨拶のカターを交換された (mjal dar rtse sprod). 大皇帝は最勝の主ラマ

(31) 司勝僧 (cf. Waddel 1895, p. 188, n. 6).

(32) 部屋係僧 (cf. Waddel 1895, p. 188, n. 7).

(33) 執事僧 (cf. Waddel 1895, p. 188, n. 8).

の手をおとり申し上げ、施主帰依僧の二人 (mchod yon gnyis = 乾隆帝とパンチェン) は御榻 (bzhugs khri) (5) と御褥 (bzhugs gdan) の高さを同じになされて、金顔を御一緒にならべられた。〔王座の〕右側には主チャンキャ・リンポチェ等の内廷のラマ達が、左側には皇太子殿下、御前侍衛の大臣達が、御前 (6) には学堂のゲシェーで念経をなされる者達が二列にならんでお座りになった。最勝の主ラマの御座の傍らにはソルボン・ケンポ、小部屋の回廊 (khyams ra) と控えの間には身分高く姿形の良い (202a1) 勅命によって高い身分に叙せられた無数の大臣達が按配されていた。〔パンチェンは〕最初にお茶を召し上がられた。

それからジャサクラマ・ゲレク・ナムカー (ja sag bla ma dge legs nam mkha') とソルボン・ケンポから最勝の主ラマの (2) 御手に身語意の依 (sku gsung thugs⁽³⁴⁾ kyi rten⁽³⁵⁾) とマンダラ、法輪 (chos 'khor), 輪王七宝 (rgyal srid sna bdun⁽³⁶⁾), 八吉祥物 (bkra shis rdzas brgyad⁽³⁷⁾), 八瑞相 (bkra shis rtags brgyad⁽³⁸⁾), 瓶, クッション (sku snye bzhugs 'bor), 絹紐の房のついた金剛杵 (rdo rje sne 'dogs can) 等の献上をなされた。

最初に主 (パンチェン) は (3) 自身の御手に身依 (仏像) をお取りになり、学堂のウムザト (dbu mdzad⁽³⁹⁾) が密教堂堂において長寿儀軌を行なう際に八吉祥物と八瑞相を献ずる〔時の〕旋律にのせて、

(34) 身依は仏像、語依は経、意依は佛塔を指す。

(35) 仏教の世界観に基づいて作られたこの世界を象ったマンダラ。具体的には須弥山を中心とし、四大大陸や日月を配したもので、儀式においては金銀等で鑄造されたものが用いられる (『清宮藏傳佛教美術』 pp. 171-172)。

(36) 転輪聖王が出世する時に現れるとされる七つの宝、すなわち輪宝、臣宝、象宝、馬宝、将宝、女宝、珠宝である。儀式の際には、これを金銀で象ったものを献上する (『清宮藏傳佛教美術』 p. 182)。

(37) 蓮の華、宝瓶、金魚、金輪、右巻の法螺貝、吉祥結、宝傘等の八つの吉祥のシンボルであり、儀式に際しては輪王七宝や須弥山マンダラと同じく金銀で象ったものが用いられる (『清宮藏傳佛教美術』 p. 183)。

(38) 八つの吉祥の供物であり、鏡、ヨーグルト、長寿をもたらす草、木瓜、右巻の法螺貝、牛黄、黄丹、白芥子を指す。

(39) 誦経中、衆僧の唱和を先導する係。

「長寿と最勝の智慧をもたらすマンドラの諸尊 (dkyil 'khor lha), ヴィジヤヤ⁽⁴⁰⁾
(rnam par rgyal ma) (4), 如意輪⁽⁴¹⁾ (yid bzhin 'khor lo) 等の不死の栄光を与える諸
尊 ('chi med dpal ster lha) や, 衆仙人の全てが, 転輪聖王 ('khor bsgyur = 乾隆帝)
の齡を百劫に増やさん事を。」と三回唱えて, 身語意の依を〔献じられ〕,

「利金剛⁽⁴²⁾ (rdo rje rnon po) なる文殊 ('jam dpal) が人の王 (mi yi rje) として遊戯
したところの, (5) 最勝の天神 (gnam gyi lha mchog = 乾隆帝) の御足の蓮⁽⁴³⁾
華に, 四洲 (gling bzhi), 須弥山 (ri rab), 日月等の, 器世間情世間 (snod bcud)
の一切の善のシンボルを献じます。」とマンドラを〔献じられ〕,

「光輝き, 神通力を有し, 生死の中にある全ての良いものをほしいままに (6)
できる千輻の金輪を献ずる事により, 人の王 (mi yi rje = 乾隆帝) の全ての祈願
が自然にかないますように。」と法輪を〔献じられ〕,

「無数の四魔⁽⁴⁴⁾の軍勢を威圧し, 思うがままに望みを普く満たすところの (202b1)
輪王七宝を献ずる事により, 大いなる政の白傘蓋⁽⁴⁵⁾ (gdugs dkar) が全〔国〕を普く
照らし良く平等になりますように。」と輪王七宝を献じられ,

「吉祥の大雨を常に普く降らし, 世間出世間の諸々の吉祥 (2) が一つにまと
められた八瑞相を献ずる事により, 吉祥なる善のシンボルが不断に与えられん
ことを。」と八瑞相を〔献じられ〕,

「見るだけ, 聞くだけ, 思うだけ, 触るだけでも, 無漏の大楽と長寿等の, 一
切所欲を (3) 与えてくれる八吉祥物を良く献ずる事により, 依怙尊 (mgon) たる
汝 (乾隆帝) は慈悲によって衆生を普く保護せんことを。」と八吉祥物を〔献
じられ〕,

「一切所欲の大きな蔵を絞る良い瓶を献ずる事で, 天命によって任ぜられた

(40) Skt. vijaya, Chn. 尊勝母。長寿儀軌を行なう時の本尊。

(41) ターラ菩薩の一形態で, 同じく長寿儀軌に用いられる本尊である。

(42) 文殊の異名 (MTK, p. 343)。

(43) 貴人の足の敬語。

(44) 人々を悩ませるもので, 煩惱魔, 陰魔, 死魔, 他化自在天魔の四つを指す。

(45) 清浄な政治の同義語。

(4) 大天 (lha chen po=乾隆帝) の望みを自然にかなえる喜びの甘露によって、一切衆生が喜びと安楽を享受する幸運 (skal bzang) が与えられんことを。」と瓶を〔献じられ〕、

「大地と大海等の全ての境域に住する傲慢なるものの髪頂髻 (do ker) も (5) かしづき (頭を下げ)、獅子の支える宝座に〔君臨する〕、全てのものの大王 (yongs kyi bdag chen=乾隆帝) が百劫に至るまで健勝であらせられんことを。」とクッションを〔献じられ〕、

「五智を自性とする大金剛杵、十力と四無畏の力を有する大金剛杵を献ずる事により、欲 (6) 天諸部 (yid srubs sde) に住む魔軍を威圧する〔乾隆帝の〕御業績が千の光明のようにひろがらんことを。」と〔唱えつつ〕絹紐の房のついた金剛杵等を、順次大皇帝の御手に献じられた。

さらに、「依怙尊たる汝 (乾隆帝) の力は四軍⁽⁴⁶⁾ (yan lag bzhi yi dpung) (203a1) を有し、全ての、栄え荒々しい (dar la drag pa) 傲慢なものの頂の宝珠⁽⁴⁷⁾ (gtsug gyi nor bu) に御足を揃えて御休みになっており、お望みの一切所欲の大雨を常に降らし、大臣は四徳 (phun tshogs sde bzhi) に富み、その権 (2) 力が虚空の果てまで覆うがごとき大宴会⁽⁴⁸⁾と無垢の黄帽派の仏の教とが共に〔不壊の〕金剛のように成就し、吉祥が与えられんことを。」という吉祥の偈とともに最勝の主ラマ (パンチェン) の御著作が (3) 完了した。

〔儀式の〕最後に…大皇帝 (gong ma chen po) は最勝の主ラマの腰に白い麦を投げて供養なさった。吉兆を示す花の雨をお降らせになった。最勝の主 (5) ラマからも大皇帝に花を投ずると、それと同時に沢山の吉兆が一時に顕現した。その後、最勝の主ラマはカタール (lha rdzas) を御手にとって「無比なるもの

(46) 象軍、馬軍、歩軍、車軍の四種類の軍を指す。

(47) 頭飾の同義語 (MTK, p. 566)。

(48) 傲慢なものを足の下に踏みしだき、という意味。

(49) 世間・出世間の両面における円満な状態を指し、具体的には法が栄え、財が満ち溢れ、五欲が満足し、解脱の果を得られた状態を言う。

(50) 乾隆帝の政のこと。

(kun bral)・仏⁽⁵¹⁾ (thub dbang)・日族⁽⁵²⁾ (nyi ma'i gnyen) よ、(6) 五髻⁽⁵²⁾ (zur phud lnga ldan) を有し僧形で遊戯した主よ、第二の勝者(ツォンカバ)等のラマ仏よ、普く吉祥の大雨をここに降らさんことを。齡を無量になして不死を与える尊格である、浄土の依怙尊⁽⁵³⁾ (bde can zhing mgon) と、ヴィジャヤと、六種類の (203b1) 光明を放つ如意輪とが不死と長寿の甘露を無量に与えんことを。十力、四無畏を自性とする、十方の仏と仙人と行者と王子と声聞と独覺と勇者と空行母の群 (2) 全てが真の最勝の加持を与えんことを。」と吉祥偈を述べることによって [仏] 道を広げた。

それについても、⁽⁵⁴⁾「十方の廣大無辺 (rab 'byams pa) の無数の浄土に住するところの全ての十力を有するものの智・慈・力の三〔徳〕⁽⁵⁵⁾ (mkhyen rtse nus gsum) (3) の王である聖堅固輪⁽⁵⁶⁾ (brtan pa'i 'khor lo) は四洲と天等から成り立つ一切世間の依怙尊にして無上の救助者 (dpung gnyen) であります。その文殊が転輪王の姿に化幻して遊戯した天神文殊皇帝大王⁽⁵⁴⁾ (gnam gyi lha 'jam dpal dbyangs gong ma (4) bdag po chen po) は、無量劫の昔から十力と四無畏、四念住、四神足、十八不共法⁽⁵⁷⁾等の捨・得・力の (5) 三つ〔の功德〕⁽⁵⁸⁾ (spangs rtogs nus gsum) の全ての性質 (bdag nyid) と、五つの条件⁽⁵⁸⁾ (nges pa lnga ldan) を有した報身の身として正等覺した仏 (sangs rgyas) であることは確かであります。しかし、〔文殊は〕辺縁と中心にいる全ての衆生を愛する利他の強い力⁽⁵⁹⁾によって、昔、インド ('phags yul) (6) で、無比の仏たる、浄飯王の息子 (zas gtsang kyi sras) が瞻部洲⁽⁶⁰⁾という

(51) 仏陀の異名 (MTK, p. 675).

(52) 文殊の異名 (MTK, p. 343).

(53) 阿弥陀仏の異名.

(54) 「十方の」から「文殊皇帝大王」までの部分は全て乾隆帝の修飾語.

(55) 仏の三つの徳.

(56) 文殊の異名 (MTK, p. 343).

(57) 「十力」から「十八不共法」までの部分は全て如来の功德の名目である.

(58) 五決定. 報身を規定する五つの条件を指す.

(59) 文殊は仏で原則的には涅槃に入った存在であるが、ここでは文殊が衆生を哀れんだために涅槃に入らずこの世に転輪聖王として化身したことを述べている.

(60) 仏陀の異名 (MTK, p. 675).

名のこの地に普く百万の円満の光明を放ち、天人を始めとする一切の衆生の無明の暗愚を払った(204a1)時に、仏と眷族達の大施主であった転輪聖王セルゲー⁽⁶²⁾(gsal rgyal)に化身しました。以来、インドの聖地と、聖文殊の所化の(2)地である大中華の地、チベットの有雪の地、大モンゴルの地等に王やバンディタや行者等の化すべき衆生の姿をとって(3)勝者の教(仏教)を繁栄させ、多くの衆生を常に安楽に按じてきたところの希有の御業績は、思慮、言語を超えて殊勝であります。現在、一切の勝者の冠、聖堅固輪にして力の(4)輪を転ずる王(転輪聖王)の姿に遊戯した大皇帝は、天の下地の上の普き衆生の聖なる頂きの飾りであり、とりわけ第二の勝者たる聖ツォンカパの無垢の宗派⁽⁶⁴⁾(5)を四海の果てまで繁栄させた御業績は慮外であって、今現在、中国、チベット、モンゴルの三国の全ての臣民を慈悲によって守護している希有の御業績(6)は古から今に至るまで比類がありません。また、とりわけ有雪の国チベットの持金剛ダライラマ御前をはじめとし、多くの僧伽と寺院と僧俗の民全ての望む所は一つであり(204b1)他にはありません。一切の衆生を大慈悲によって以前のとおりに守護されんことを。」と〔祈願して〕、(中略)

持金剛チャンキャがモンゴル語に通訳をなさられて皇帝に御伝えになられると、大皇帝は大変御喜びになり、「パンチェン・(205b1)エルデニは仏であるので、今おっしゃられたことは全て理にかなったことばかりです(don gnas)。私も王政を仏法に則って護り、宮殿等の、仏教が存在している全ての地(2)において、如来の身語意の依を沢山建立して供養致しましょう。僧伽も沢山新設して、運営のための基金を備え、仏教が一層盛大になるように致しましょう。臣(3)下の者も慈しみによって護り、仏教に対して不信の輩は力と軍隊によって

(61) シャカが仏法を説いた時という意味。

(62) Skt. prasenajit, Chn. 波斯匿王。シャカムニ在世時のコーサラ(kosala)国王。

(63) 『華嚴經』によると文殊菩薩の住む地は東方の五台山にあるといわれ、それは北魏時代から現在の山西省五台县にある五台山であるとされてきた。そのため文殊の加持する地は中国を指す。

(64) ゲルク派のこと。

減ぼして仏教の門に入らしめ、信仰させるように致しましょう。今や天神と三宝に祈願を (4) 立て、パンチェン・エルデニの御言葉の如くに致しましょう。」と如意珠の首飾りの如き金の善言をいくつも発せられた。

5. 2. パンチェンと乾隆帝の神学的位相

パンチェンが宮中へ到着してから法要の席に着座するまでの記述に見られるのは、前章でも述べたパンチェンと乾隆帝の「対等の礼」についてである。パンチェンは輿に乗ったまま皇帝の待つ部屋の入り口まで入っており (訳文 201b3-4)、パンチェンと皇帝の挨拶はチベット風にカターの交換によってなされている。パンチェンと皇帝の座 (bzhugs khri) および褥 (bzhugs 'bor) は同じ高さであった (訳文 201b4-5)。

儀式が始まると、パンチェンは仏像・経・仏塔、マンダラ、法輪、輪王七宝、八吉祥物、八瑞相、瓶、クッション、カターのついた金剛杵等をそれぞれの靈験を述べる吉祥偈とともに順次皇帝の手に献じていった。ここで述べられている偈はパンチェンがこの儀礼のために特別に創作したものである。⁽⁶⁵⁾

この中では乾隆帝は数々の言葉によって言い換えられ讃称されている。これらの言葉から我々は仏教世界の中における乾隆帝の神学的位相を知ることができるのである。乾隆帝の同義語は以下に見るように主に三つのグループに分けることができる。一つは王のイメージを述べているグループ (転輪聖王、人の王、全てのものの大王)、一つは文殊を示す言葉のグループである。文殊を示す言葉は細かく言えば直接的に表現した言葉 (文殊、利金剛、堅固輪) と、間接的に表現した言葉 (仏、天神、大天、救護者、依怙尊) の二種類に分かれる。最後の一つは大施主、皇帝等の地上的イメージを述べているグループである。これらの言葉の言い替えはサンスクリットの修辞学に由来する同義語の体系に基づいており、辞書や修辞学の辞典などで原義を確認できるものである。日本では文殊を菩薩とし如来 (仏) とは言わないが、チベットでは、訳文中にあるように

(65) 原書は故宮内に現存している (王家鳳 1988, p. 20)。

文殊も仏とされる（訳文、203b3-5）。転輪聖王は仏教における理想的帝王であり、仏典では仏の化身の一つとされている（石濱 1992, pp. 68-70）。仏教の仏身論には仏の存在様態として法身、報身、化身の三つがあり、化身は報身を基体としている（石濱 1992, pp. 70-71）。乾隆帝の場合は、報身の文殊の化身が転輪聖王としての乾隆帝となる。

チベット仏教圏のイコノロジーでは文殊は剣と経秩を手にした姿によって表現される。現在にまで残る乾隆帝の肖像画の中にはこの姿をとるものが数多くある。⁽⁶⁶⁾ また、従来注目されていなかったことであるが、乾隆帝はパンチェンに宛てて出した書簡の冒頭には、

永遠なる天の強い命令により広大な瞻部洲の大地に力の輪を転ずる皇帝の勅。パンチェンエルデニに下した。

という句を用いていた（P4N, 93b5, 145a2）。転輪聖王はイコノロジー上では法輪を持つ姿によって表現されるが、乾隆帝の肖像にも手に輪を有したものがある（『清宮蔵傳佛教美術』p. 57）。このように乾隆帝自身にも自らが文殊であり、その化身としての転輪聖王であるとの意識が存在した事を知ることができる。

次にパンチェンの神学的位置づけを確認しておきたい。儀式の最後に乾隆帝がパンチェンを「仏である」と言及しているごとく（訳文、205a6-b1）、パンチェンは神学上は仏、それも阿弥陀仏と信仰されていた（P4N, 1a1）。阿弥陀仏はマンダラでは西方に位置し長寿を象徴する仏である。パンチェンが乾隆帝の古希の祝いに至った背景には、パンチェンの阿弥陀仏としての本性が大きな役割を果たしていたことは疑いない。また、第4節第2項で触れたようにパンチェンは乾隆帝とともに着座する際には東面していた。⁽⁶⁷⁾ これはチベットが中国の西方に位置することに対応させたものとも考えられるが、マンダラで西方に位置する阿弥陀仏がマンダラの中央にくることの多い文殊の右手に座ったとも解釈でき

(66) 「乾隆皇帝佛装像」『清宮蔵傳佛教美術』p. 57；『雍和宮』pp. 26-27；『滿蒙喇嘛教美術圖版』「傳乾隆聖容圖」p. 16。

(67) p. 44 参照。

るのである。

ここまで述べて来たことによって乾隆帝とパンチェンが「対等の礼」を行なった意味が自ずと明らかになって来たことと思う。パンチェンも乾隆帝もチベット仏教の世界の中ではいずれも「仏」であった。チベット仏教の世界には数々の仏が存在するが、いずれも法身仏に帰一するという意味において平等であり、諸仏の間に上下関係は存在しない。乾隆帝がパンチェンにできうる限り対等な地位を与えようとしたのは、この仏としての平等性を鑑みてのことだったと思われるのである。

5. 3. 乾隆帝とパンチェンの前世における会見について

訳文中に乾隆帝の前世についてパンチェンが言及していることは注目すべきことである(訳文, 203b5-204b1)。P4Nにはこの他の部分にも乾隆帝の転生譜に触れた部分がある(P4N, 219a6-b1)。また、以下に見るような乾隆帝の発言から、乾隆帝も自身の前世を認識していたことが解る。

ラマと実際に御会いしてもしなくても違いはございませんが、今日ラマと御会いできて私は大変嬉しく思います。前世の良い祈願の縁が確かにあるでしょう(P4N, 174a4)。

今、我々帰依僧と施主が実際に会うことができたことは、前世の祈願と発心によって生じた良い因縁が熟すに至ったためでしょう。それ故私もラマに法と随許を沢山御願い申し上げたいと思います(P4N, 182a1-2)。

乾隆帝とパンチェンは前世に何度も会合していたために、「実際に会うことができてできなくても違いはな」かったのである。

次に、この両者の前世における関係を明らかにしてみたい。訳文中にも言及されているように乾隆帝にはセルゲー以外にもいくつかの過去世があった(訳文, 203b5-204a3)。以下に、これらの過去世のうちパンチェンと乾隆帝の今生での会見の前提として両者に共通に認識されていた前世の出会いについて検討していきたい。

(a) ティソンデツェン王とパドマサンバヴァ

二人の現在の会見において踏まえられていたと思われる前世としては、まず、九世紀のチベットにおけるパドマサンバヴァとティソンデツェン王の関係が注目される。ティソンデツェン王は、チベットで最初の僧院サムエ寺を建立し、その落慶供養のために顕教の菩薩シャーンタラクシタと密教行者パドマサンバヴァをそれぞれインドから招聘した王である。このティソンデツェンはチベットでは昔から文殊の化身であるとされており、一方のパドマサンバヴァはその伝記によれば阿弥陀仏の化身として記されていた⁽⁶⁸⁾。つまり、ティソンデツェンとパドマサンバヴァの神学的位相はパンチェンラマ四世と乾隆帝のそれと全く対応しているのである。

七月二十九日に乾隆帝とパンチェンは普寧寺において会見を行なっている。この普寧寺は乾隆帝がティソンデツェン王の建立したサムエ寺を模倣して建立したものである⁽⁶⁹⁾。このことは乾隆帝が自分の前世としてティソンデツェン王を認識していた間接的証拠と言える。

また、パンチェンが熱河に到着して二日目の七月二十三日、諸皇子がパンチェンを訪問した。諸皇子の中に一人だけ公主がいたが、この第五公主は七才の女兒であった。パンチェンはこの公主をダキニ天の化身 (nam 'phrul) として特別に扱い、ソナム・ペルキ・ドルジ (bsod nams dpal gyi rdo rje) という名前を授けた (P4N, 183b6-184a6)。第五公主は乾隆帝が諸子の中でもっとも寵愛していたと言われる人物である。この公主について乾隆帝は以下のように述べている。

(68) 同時代のロンドルラマの記したパンチェンの転生譜にはティソンデツェン王は文殊の化身と言及されており (KNS, p. 435)、パンチェンの前世としてパドマサンバヴァが揚げられている (KNS, p. 373)。

(69) 建立の直接の動機は長年にわたり清朝の北辺を脅かしていたジュンガルに勝利した記念である。碑文には「抖贊轉輪王 (ティソン・デツェン王)、功德甚深大。造寺於西域、其名三摩耶 (サムエ)」と (普寧寺碑文 勅撰; 張羽新 1988, pp. 383-386)、明確にティソンデツェン王の業績をならう旨が記されている。

(70) この年の五月二十日に乾隆帝は第五公主を軍機大臣の和坤 (heshen) に降嫁させ、和坤を御前大臣 (gocika amban) とした (『滿文上諭檔』五月二十一日)。和坤が晩年の乾隆帝の身邊にあって権力を壟断していたことは著名である。

「この公主は仏教に帰依しており、私も息子と区別なく目をかけて、寵愛をしているものである。前世の良い習気によってパンチェンエルデニに対して信心篤く、とても会いたがっているので、今兄達とともにパンチェンエルデニとの会見に送ったのである。現在と将来に利益ある善法の加持を与えてやってください。」(P4N, 183b4-6)

この前世とはおそらく第五公主がティソンデツェンの王女ペマセル (padma gsal) であった時のことを指すと思われる。ペマセルはパドマサンバヴァとの会見当時八才であり (PKT, p. 377), 同じくダキニ天の加護のあるものとされていた (PKT, p. 384)。この二点は上記の第五公主と対応している。この推測が正しければ乾隆帝とパンチェンラマの間には、公主も含めた少なくとも三人のチベットにおける前世の物語が認識されていたことになる。

(b) パクパとフビライ

朴趾源の『熱河日記』中の「班禪始末」という節によると、

班禪額爾德尼，番語猶云光明神智法僧。自言其前身巴思八。（『熱河日記』「班禪始末」1b）。

班禪又言，正德天子會我豹房。正德時所謂活佛未嘗入中国，而其事俱有徵多前輩傳記中。語然遼絕數百年間殊為怳忽以此知。班禪乃巴思八後身，或為塔立麻，或言前代所有活佛皆此輪轉。未可臆斷其真否也（『熱河日記』「班禪始末」5b）。

蓋班禪自言前身巴思八。（『熱河日記』「扎什倫布」4b）

等とあり、当時パンチェンが元朝のパクパ（巴思八）を始めとし、前代の数々の大ラマの転生であると評判であったことを記している。パクパとは言うまでもなく元朝最盛期の皇帝、フビライに仕えたチベットの高僧である。パンチェンがパクパであった時、乾隆帝の前世がなにもものであったかは『熱河日記』に記載はない。しかしパクパの施主であったフビライが文殊の化身として名高ったことから（石濱 1992, p. 68）、神学的に対応関係にある乾隆帝がフビライの再来と

考えられていた可能性は高い。この推測を間接的に裏付ける事情がもう一つある。清朝はその開国の当初からチベット仏教を奉じており、時の都瀋陽においてはバクパ所製の仏像を都一の寺にまつていた。一六三八年にこの寺の建立に際して立てられた碑文には以下のように記されている。

至大元世祖時，有喇嘛帕斯八，用千金鑄護法嘛哈噶喇，奉祀於五台山，後請移於沙漠。又有喇嘛沙爾巴胡土克圖，復移於大元裔察哈爾林丹汗國祀之。我大清國寬溫仁聖皇帝，征破其國，人民咸歸。時有喇嘛墨爾根載佛像而來，上聞之，乃命衆喇嘛往迎，以禮昇至盛京西郊。…（「實勝寺碑文」瀋陽 剛林；張羽新 1988, pp. 209-211）。

この碑文によると元朝のフビライハン（世祖）の時代にバクパ（帕斯八）が鑄造したマハーカーラ（Skt. mahākāla, Chn. 嘛哈噶喇）の像は当時、元朝の末裔リクデンハン（林丹汗）の手に所蔵されていたが、リクデンが清朝に敗退した後清朝の手にわたり、ここ實勝寺に奉られた因縁が示されている。前述した乾隆帝とフビライの神学上の対応と、このような清帝室のバクパに対する篤い崇敬を鑑みる時、当時、乾隆帝をバクパの施主フビライの再来とする認識が存在していた可能性は非常に高いと言えよう。

6. まとめ

本稿は、一七八〇年におけるパンチェンと乾隆帝の会見が、従来冊封政策的な視点から深読みされつづけてきたことは一面的な評価であり、この会見に臨んだ人々がパンチェンを実際どのように認識していたのか、という基本から見直さねばならないとの問題を最初に提起した。そして、パンチェンと乾隆帝との実際の会見は漢文史料の記述（3. 1.）とは逆に非常に密接なものであったこと（3. 2.）、その会見内容は公私にわたるまで仏教色一色であったこと（4. 1.）、パンチェンと乾隆帝は対等な礼を行なっていた事（4. 2.）等を挙げ、それは儒教思想とは異なる価値体系の存在がなければありえないことを述べた。続いてパンチェン訪清の主要目的である長寿儀軌の修された日の史料の訳注を行ない（5. 1.）、そ

れに基づきつつパンチェンと乾隆帝の仏教神学上の位相はそれぞれ仏として対等であったこと(5.2.)、二人は前世にも何度か出会って仏教を興隆していたという思想の存在について述べた(5.3.)、そしてこれらの思想に基づけばパンチェンの来錫の儀礼上の意味も、席次も、対等の礼も無理なく解釈できることを明らかにした。

チベットと中国の関係は言うまでもなく仏教を抜きにしては考えられないものである。しかし多くの研究者はこの仏教的な世界観を無視し、大切なのは仏教を「利用」して行なおうとしていた何かであるとする。しかし、本稿で検討したようにパンチェンと乾隆帝はその会見において、中国とチベットの上下を規定するようないかなる儀礼も政策の宣言も行なっていない。当時の人々が目にし耳で聞いたのは、彼等が仏教に基づいた政治の繁栄と仏教僧団の繁栄を祈願する姿と、乾隆帝とパンチェンがチベットやモンゴルにおける過去世においても行なってきた仏教興隆の物語であったのである。

このような思想に裏付けられたパンチェンと乾隆帝の会見の視点はすでに国家や民族や王朝を止揚したところにあったのである。従って、この会見を民族や国の上下区分を明らかにする視点(冊封、朝貢)のみで評価することは一面的な見方にすぎないと言えはしないだろうか。

引用文献

- KBY *krung go'i bod sa gnas kyi lo gyus yig tshang phyogs btus* (『中国西藏地方歴史資料選輯』). tshe ring phun tshogs ed. 西藏人民出版社 1989.
- KNS *klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum* (下冊). 西藏人民出版社 1991.
- MTK *mngon brjod kyi bstan bcos mkhas pa'i rna rgyan* (『藻飾詩論』). rin spungs ngag dbang 'jig grags. 民族出版社 1985.
- P4N *rje bla ma srid zhi'i gtsug rgyan pan chen thams cad mkhyen pa blo bzang dpal*

ldan ye shes dpal bzang po'i zhal snga nas kyi rnam par thar pa nyi ma'i 'od
zer zhes bya ba'i smad cha, 'jam dbyangs bzhad pa dkon mchog 'jigs med
dbang po ye shes brtson 'grus grags pa'i sde (1723-1791). 1785-1786.
 TOYO BUNKO No. 116-1299 (2). (cf. 漢訳『六世班禪洛桑巴丹益希伝』
 許得存 卓永強 西藏人民出版社 1990.)

PKT *O rgyan gu ru padma 'byung gnas kyi skyes rabs rnam par thar pa rgyas par*
bkod pa padma bka' thang yig. Indian Reprint.

『滿文上諭檔』乾隆四十五年 第一歷史檔案館藏. 全宗 3. 箱 45 (1) (2).

『內務府奏銷』第一歷史檔案館藏. film no. 111-360 (乾隆四十五年四月～五月),
 361 (同六月～九月), 362 (十月～十一月); film. 112-362 (十月～十一
 月).

『清實錄 第二十二冊 高宗純皇帝實錄(十四)』. 中華書局 1986.

『李朝實錄 第四十七冊・正祖實錄 第一』. 學習院東洋文化研究所 1966.

『熱河日記』朴趾源. 『燕臺』 vol. 13-20 「燕巖錄 說叢」. 東洋文庫 VII-5-3.

『清宮藏傳佛教美術』. 紫禁城出版社・兩木出版社 1992.

『滿蒙喇嘛教美術圖版』. 新文豐出版 中華民國六十八年.

『北京歷史地圖集』. 北京出版社 1985.

Waddel, L. Austine.

1895 *Buddhism & Lamaism of Tibet.* New Delhi.

石濱裕美子

1992 「摂政サンゲギャンツォの著作に見る十七世紀チベットの王権論」
 『東洋史研究』 51-2. pp. 56-76.

尹育政

1989 『雍和宮』. 中国青年出版社.

王家鵬

1988 「六世班禪的一封信」. 『紫禁城』 總四十四期 pp. 17-21.

張羽新

1988 『清政府与喇嘛教』. 西藏人民出版社.

1989 『清代四大活仏』. 清代知識叢書. 人民大学出版社.

陳鏘儀·郭美蘭

1992 「六世班禪承德入觀述論」，『清代宮史求實』，紫禁城出版社
pp. 141-157.

多傑

1990 「六世班禪大師東來旅途記要」，『藏学研究』，天津古籍出版社
pp. 12-61.